〔年中行事故實考一月〕萬歳　是は延暦年中、京都を今の平安城に移されし時より、衣食住の三つを祝ける、其一つなりとぞ、其詞に御殿作の結構と唱ふ、是住の事をことぶくなり、中古室町殿時代は、大夫は扇を持ち、才三は鼓を持ち、兩人共に掛素袍にて、頭巾の上に士烏帽子を著、壺袴をきたり、近代正月五日、禁中御釿始の後、清涼殿の南庭にて、千壽萬壽といふあり、兩人共に素襖ゑぼしにて勤之、關東にては三河院内村万歳作大夫、毎年江府へ下り、正月十一日御勘定所にて萬歳を勤め金子を拜賜す、昔淺草御藏にして勤め、米拾五俵を賜けるとぞ、當國知多郡數村森福大夫、松福大夫、米福大夫といふ萬歳、加木屋村上羽大夫といふ萬歳、何れも三州院内村の分流なり、先先より傳來す、春日井郡味鏡村陰陽師十六人、何れも萬歳を勤む、其内兀大夫といふ者は、先祖陰陽師石田新右衞門と云ふ者の家へ、源敬公御鷹狩の節立よらせたまひ、兀大夫と名を賜り、代々御祝儀を勤來りしが、今は中絶せり、其家代々兀大夫と稱せり、

〔千紅萬紫〕せんす萬歳の繪に　嘉辰令月吉書始、萬歳千秋男踏歌、あら玉のとしのみはしのゑたつゞみうてやはやせやせんす萬歳

〔皇都午睡初編上〕十二月萬歳　京に京土産とも、十二月萬歳とも云物有、是は色文句ならず、唯年行事のみにて、初春の壽祝ふ松飾、表にさら〳〵新袴、モノ大黒屋德右衞門年始の御禮忝ひ禮者の外はストントン〳〵、手鞠や拍子と諷ひ出し、ちよど三百六十豆の數、皆禮者の事こそ目出たけれと、終る迄いと興ある物なり、

〔俳諧歳時記十二月〕歳藏市　江戸日本橋の東二町ばかり四日市にあり、三河萬歳江戸に來りて、脇士の才藏を傭ふ也、この才藏は、安房上總よりいづるもの也、毎年四日市にて、その價をさだめて雇ふといふ、これを才藏市といふとぞ、

〔東都歳事記四十二月〕才藏市は當時天保比なし、近き頃迄は下旬の夜、日本橋の南詰四日市にありて、

歳藏市